クルドの農業と農民 ＜その 5＞

イラクの農民気質と農業普及

AAINews 70 号でも紹介したが、クルドの農民は良い意味で非常におおらかで、突然の訪問者である我々を暖かく歓迎してくれた。クルドの人々は、一般的に親日的であると言って良いだろう。

このおおらかさは、別の意味で農業活動の中でも感じられる。つまり、多くの住民が農業に従事している中で、収益の観念が若干欠如しているようにも感じた。「どれぐらい儲かる？」、「どれくらい生産しているの？」と言った質問には、ほとんど明瞭な答えは得られなかった。クルド地域では多くの住民が農業者である一方、多くの農民が農業からの収入だけではほとんどの場合生活維持は困難なようだ。天水でのコムギ栽培農家では、「今年は雨が不順でほとんど収穫は無理だ」と微笑みを含みながら答えてくれた。また、農業収入が少ない場合は「ペシャメルゲ」で働かせてもらうとの話もよく耳にした。ペシャメルゲとは、クルド自治政府の軍隊で、伝統的にこのように呼ばれている。

クルド地域の多くの農民は大家族である。農業以外にも、親の年金、農民の農業外収入、そして子供らの労働などを寄せ集めて、家計を維持している。農家の多くは、前述したペシャメルゲへの一時的な入隊で収入の一部を支えており、政府もこのような雇用を通して、農民収入の手助けをしているように見受けられる。詳しくは知らないが、かなり簡単に入隊できるように感じた。

一方、このような不安定な農業生産を改善するため、政府の農業普及への努力は強く感じられる。普及所の話では、農民への講習会、現地視察、デモ圃場での展示紹介など各種の対策を行っているとの話であったが、一方でその効果が充分かという懸念も感じられた。普及方法は、普及機関での研修や、農地でのデモンストレーションと聞く。その対象農民は地域の指導的農民が多く、中小農民までの取り込みには至っていない場所があるようだ。また、農業普及用の資材（パンフレットや栽培マニュアル）などは農民の手元には全く見られなかった。クルド内の普及機関からの聞き取りでも、講義は講師まかせで、また講義用の資料も普及機関に保管・蓄積されていない。農民の一部は読み書きも不充分であることを考えると、適切な普及材料の作成と配布体制の確立は必要であろう。

このような中、農業資材会社の普及活動は一定の役割を担っていると感じられた。見聞した農業資材会社の普及事例では、資材会社が資材の販売と共に、技術提供を行っていることは前にも紹介したが、このような資材を売る側と、使う側の連携が一部で見られる。また、グリーンハウスの販売資材店では栽培指導マニュアルの作成を検討していると聞いた。さらに、新たな作物生産に必要な機材を資機材を買える資金的余力を持っていない農民に提供し、そのかわり農民圃場はデモ圃場として、資材会社の広報の場になっている事例もある。

別の事例で、あるNGOが野菜栽培の普及活動を行っていた。資材は NGO が提供し、地域の農業技術者を雇用し、地域単位で農民の参加を呼びかけている。農民は圃場維持に一定の労働力を提供し、収穫物から得られる収益を皆で分ける。NGO の技術者に聞くと、最大の課題は老人の説得であったと聞く。若者は比較的容易に参加するが、老人は共同作業による栽培活動について理解が得にくいと聞く。しかし、このような取り組みは今後の普及活動の良い事例として考えられないだろうか。

これまで普及活動に関与の少なかった研究機関も近年、普及活動に積極的に参加するようになってきている。栽培技術を振興する研究機関の普及業務への参加は重要である。ただ、普及活動と研究活動は視点が違うことから、これらの架け橋への支援活動が重要と考えられる。イラクの穀倉地帯であるクルド地域で、大らかな農民が、少しでも農業で自立していく支援を行えればと考える。

山間部の NGO 栽培活動地

果樹農家の聞取り

民族服を着た農家